

# 明治期における与謝野晶子の創作活動

—出産・育児をめぐる晶子の思い—

教育創発学コース 栗原浪絵

Yosano Akiko's Literary Works in the Meiji Period  
—Akiko's Thoughts on Her Giving Birth and Raising Children—

Namie KURIHARA

Akiko Yosano, a famous tanka poet in Japan, wrote a lot of tanka poems and essays concerning with her giving birth and raising children in the Meiji period. She also made many children's stories because she thought they were not enough during the era. This paper describes how she developed her works during the Meiji period when she gave birth to seven children and brought them up.

The following three points are discussed in this paper. First, she came to make the tanka poems on her life with children after she had the twins in 1907. Second, in her essays and her children's stories, she expressed her views freely without any hesitations. She wrote the essays and children's stories with intelligence and a realistic point of view. Third, in her book of tanka poems called "Seigaiha", she expressed how hard it was to give birth to a baby without any shame. She also made a lot of tanka poems of her child care showing her failure or loneliness honestly.

Akiko's works in the Meiji period certainly reveals how faithfully she wrestled with having and taking care of her children.

## 目次

はじめに

### 第1節 子どもを主題とする短歌の登場

- a. 命への思い
- b. 若き日々への追憶

### 第2節 新たな分野の開拓——童話と評論

- c. 晶子の遊び心——童話「おとぎばなし少年少女」
- d. 出産・育児をめぐる晶子の考え——評論集「一隅より」

### 第3節 歌集「青海波」の意味

- e. 育児の現場
- f. 出産の激しさ

はじめに

与謝野晶子といえば「みだれ髪」の短歌に象徴される情熱的な恋愛を思い浮かべる人が多数であろう。そのような晶子が明治期後期から子どもを主題とした短歌

を作り、評論の執筆や童話の創作にも取りかかっていたことは意外と知られていない。少女のとらえがたさを魚に託して詠った「少女子は魚の族かとらへんとすればさまよく鱸ふりて逃ぐ」という歌は、与謝野晶子が1909(明治42)年、歌集、「佐保姫」に発表したものである。おそらく我が子のことを詠ったと思われるこの歌には、「少女子」を前に奮闘する晶子の姿と同時に、大人の意図に反して軽やかに動き回る子どもの様子が浮かび上がる。明治期以降、十一人の子どもを育てた晶子にとって子どもの存在は短歌や詩の最も身近な主題であると共に、童話や評論を執筆する上でも重要な意味を持っていた。本論文においては明治期における与謝野晶子の創作活動を出産・育児をめぐる晶子の思いに焦点を当てながら描出することを目的としている。

晶子が子どもを主題として短歌を詠むと共に、童話の創作に着手し、さらに評論活動を開始したのは、明治期の後半であった。この時期、晶子は五人の子どもを抱え、鉄幹との生活も決して物質的に恵まれてはいなかったものの、母親としてそして文筆業にいそむ

一人の女性として充実した時期を迎えていたといっ  
 よい。「みだれ髪」で名を馳せていた晶子が子どもに  
 関する短歌を明治期後半から多く詠むようになって  
 いたこと事体、注目に値する事実だが、童話や評論  
 という新しいジャンルに晶子が挑戦する際の最も大  
 きな動機に、出産や育児をめぐって晶子が遭遇  
 した疑問があったことを忘れてはならない。歌人  
 として出発した晶子であったが、我が子に与え  
 る良質のお話がないという思いから童話を創作  
 するようになる。さらに、出産や育児という経  
 験をネガティブに捉えざるを得ない女性の生き  
 方に対して、評論活動という形で社会的な発言  
 を試みるようになっていた。

波乱に満ちた晶子の生涯や業績についてはさま  
 ざまな方向から分析が進んでいるが、出産・育  
 児という主題に的を絞って明治期の彼女の作  
 品を詳細に検討したものは見当たらない。明  
 治期の晶子について考察したものはそのほと  
 んどが彼女の第一歌集、「みだれ髪」の作品分  
 析、及び背景の分析に集中している。また、  
 晶子の母性保護論争、及び児童文学に焦点を  
 当てた研究もいくつか存在するが、いずれも  
 大正期の晶子に照射したものである<sup>1)</sup>。この  
 ような研究群のなかで筆者が注目したのが、  
 歌人の松平盟子による短い論稿である<sup>2)</sup>。  
 松平は晶子の「子供へのまなざし」を明治期  
 に書かれた童話・短歌の双方から捉えようと  
 試み、晶子の子ども観を「メルヘンチックな  
 情緒」を含むものとして描いている。しかし、  
 果たして晶子の子ども観は「メルヘンチック  
 な情緒」を含むものとしてのみ捉えることが  
 できるだろうか。このような初発の問いが本  
 稿を執筆しようとした動機の一つである。

なお、本研究を筆者は晶子研究の第一歩と  
 して位置付けているが、晶子がどのようにして  
 出産・育児にかかわりつつ明治期の創作を  
 進めていったかを探ることは、ある女性が出  
 産・育児を通してどのような試行錯誤を繰  
 り広げたか、そしてその試行錯誤をどのよう  
 に創作活動に結び付けていったのか、その  
 プロセスを検討するという点でも意味を持  
 っていると考えられる。現代においても私達  
 は晶子の生き方から多くを学ぶことが出来  
 るだろう。

## 第一節 子どもを主題とする短歌の登場

### a. 命への思い

晶子が「みだれ髪」に続く第二歌集、「小扇」  
 を刊行したのは1904(明治37)年1月のこと  
 である。晶子は前年の11月に長男の光を出  
 産し、一児の母となっていた。

晶子は鉄幹と結婚してからの三年半を東京の  
 渋谷で過ごしているが、晶子が長男の光を出  
 産したのは宮益坂と呼ばれる地にある小高い  
 丘の上の家であった。晶子と鉄幹が「山の家」  
 と名付けたその家で二人は、結婚後しばらく  
 してようやく落ち着いた生活を送るようになって  
 おり、晶子はそこで25歳にして母親となっ  
 たのである。晶子は母になったこと、そして  
 子どもを得たことの意味を「子どもによって  
 人生の意義を半分知った」と表現している<sup>3)</sup>。  
 彼女にとって新たな命をこの世に誕生させた  
 ことは「人生」そのものの価値を熟考させる  
 ほどの重みを持っていた。

20代の前半を恋愛と短歌創作に身を燃や  
 して過ごした少女、晶子——その晶子が出  
 産経験を通して新たな境地を開こうとして  
 いたことは注目に値する。彼女は歌集、「小  
 扇」において「われ若うてちひさき扇のつ  
 まかげにかくれて観たる恋のあめつち」と  
 いう歌を発表している<sup>4)</sup>。「私は若かった  
 ので恋愛ばかりを人生と思い、扇のかけ  
 で興奮しているにすぎなかったのです。今  
 はその扇が本当に小さかったことを知り  
 ました」と、晶子は現実に目覚めていく心  
 情を素直に表現している。歌集、「小扇」と  
 いうタイトルの元となったこの歌において  
 晶子は、恋愛にのみ目を向けていた自己の  
 成長と革新を表明したのであった。

母になったことで人生観が変わったことを  
 表していた晶子であったが、その思いを母  
 親になった直後に短歌の中で表現したわけ  
 ではない。1904(明治37)年5月に刊行  
 された「毒草」においておそらく我が子、光  
 のことを歌ったと思われるものはわずか二  
 首である。7月には次男の秀が誕生。二人  
 の母となったこの時期に注目したいのは  
 晶子が発表した詩、「君死にたまうことな  
 かれ」である<sup>5)</sup>。戦地に赴く弟に向かっ  
 て死ぬな、と直截に呼びかけるこの詩は  
 国家を挙げての戦争協力を是とする人々  
 からの批判を浴びたものの、晶子は堂々と  
 反論を加えている<sup>6)</sup>。光と秀という二  
 児の母となっていた晶子はこの世に賜  
 った命のかけがえのなさを、独身時代に  
 比して、より一層感じていたに違いない。

20代後半を迎えた晶子は二人の息子を  
 抱えて貧しい生活の中でも、充実した短  
 歌創作の日々を送っていた。1904年11  
 月、晶子は千駄ヶ谷へ転居。鉄幹の主宰  
 する雑誌、「明星」も最盛期を迎えつつあ  
 った。後に彼女はこの時期を振り返って  
 以下のように述べていたという。

「明治38(1905)年という年はわたくし  
 の28歳にあたるのである。わたくしの物  
 質生活が極めて貧困であった時代で、わ  
 たくしは外出着に冬は銘仙の羽織と夏は  
 縮の浴衣が一枚あっただけである。しか  
 しわたくしは

そういう中で、歌の三昧に入ってしまうと何事も忘れることのできた幸福な時代である。』<sup>7)</sup>

「銘仙の羽織」一枚、そして「縮の浴衣」一枚という具体的な思い出は、文壇で名を馳せながらも生活に困窮していたこの時代の晶子の生活の象徴のようにも思われる。しかし、晶子も語っているように、短歌創作に没頭できるという点では「幸福な時代」だったのだろう。

確かに晶子は1905(明治38)年から1906(明治39)年にかけての二年間に精力的に歌を詠み、「恋衣」、「舞姫」、「夢之華」の三冊を世に問うている。

髪に挿せばかくやくと射る夏の日や王者の花のこがねひぐるま<sup>8)</sup> 「恋衣」

地はひとつ大白蓮の花と見ぬ雪の中より日ののぼる時<sup>9)</sup> 「夢之華」

夏の日にひまわりを髪にさす様子を歌った前者の歌、そして雪の中の日の出を白蓮の花にたとえた後者の歌、いずれも晶子らしいダイナミックな視点が生きている。日露戦争後、文壇は徐々にロマン主義の時代から自然主義の時代へ移りつつあったが、晶子の歌は「みだれ髪」の頃と変わらぬ勢いと輝きを持っているように思われる。それでは晶子は出産・育児をテーマにどのような歌を詠んでいたのだろうか。意外なことに晶子はこの時期、ほとんど子どもを主題とした歌を創作していない。しかも前述に紹介したような勢いのある歌とは対照的に、淡々と自らの心情を吐露したものなのである。

なにとなくさびしうなりぬ相見てはあまりうれしと語らぬ子ゆゑ<sup>10)</sup> 「夢之華」

「なにとなくさびしうなりぬ」という言い回しで晶子はおそらく息子の光のことを詠んでいるに違いない。うれしさをあまり表現しない我が子を前にして晶子は、母親としての無力感を感じているのかもしれない。晶子が我が子のことをテーマにして生き生きと自己の思いを歌い上げるのは1907(明治40)年、三十歳を迎えた晶子に女の子の双子が生まれてからのことであった。

#### b. 若き日々への追憶

1907(明治40)年、三十代に突入した晶子は、三月に双子の女の子を出産した後も、活動の幅が狭まるどころか次から次へと新たな活躍の場を見出していった。6月には閨秀文学会の講師を開始。晶子が我が子のため、そして経済的理由から初めての童話を執筆し、雑誌「少女世界」に発表したのもこの年のことである。あまり知られていることではないが、晶子はこの童話を皮切りにして二十年余りにわたって百編に及ぶ童話を

創作したのであった。

しかし、本来、「みだれ髪」で自らの熱情を高らかに歌い上げた晶子が童話の創作のみで満足するわけはなかった。晶子が自らの短歌世界の一部を我が子に関する話題を主軸に構成し始めたのは、翌(1908)年7月に出版された歌集「常夏」においてである。

少女子は御胸に入りて一天下治むるときこととり申す<sup>11)</sup>

少女子は春の夕ぐれ螺がたの階をのぼるとおん手によりぬ<sup>12)</sup>

上記の二首は、おそらく1907(明治40)年3月に生まれた八峰と七瀬のことを歌っていると思われる。晶子の「御胸」であたかも「天下」をとったような顔をしている我が子、そして階段を上る際に母親の手に近付いてくる我が子——これらの歌からは、子どもたちの日常に細やかな感性で寄り添っている晶子の姿が浮かび上がる。

確かに上記の二首からは、歌人として活躍しつつあった晶子が家庭生活においても母親として自覚的に子どもたちの成長に寄り添っている姿が想像される。しかし、晶子自身がある明確な意識を持って子どものことをテーマに詠み始めたのは、次の歌集、「佐保姫」からではないかと考えられる。その根拠として筆者が指摘したいのは、「佐保姫」が出版された1909(明治42)年は晶子にとって転機の日だったことである<sup>13)</sup>。晶子はこの年以降、次第に社会時評や婦人問題への意見を新聞や雑誌に発表するようになり、女性としていかに生きるべきか、自らの経験を元に論じるようになっていた。

それでは晶子に人生の転機と呼べる節目を準備させたものは何だったのか。評論家、晶子の誕生を後押ししたものは何であったのか。それこそが度重なる出産の経験なのである。1909年、3月3日、双子の八峰、七瀬につづいて三男の麟が生まれ、晶子は五人の子どもたちの母となっていた。後に詳しく触れるがこの第五子、麟の出産において初めて晶子は、女性の大仕事ともいえる出産に確信を持つようになったのである。「明星」の終刊を機に意気消沈していた夫の鉄幹とは対照的に、晶子は生活上の必要にも迫られてますます文筆業に精を出すようになっていた。

興味深いのは「佐保姫」においては「常夏」とは異なり、子どもの個の様子だけではなく子ども同士の関係や子どもたち皆の様子がダイナミックに詠まれるようになることである。

白鳥の裔とおもへる少女子と獅子の息子とねよげにぞ寝る<sup>14)</sup>

子らの衣皆新らしく美しくしき皐月一日花あやめ咲く<sup>15)</sup>

一首目においては「白鳥」や「獅子」に託して娘と息子の眠っている様子が語られている。女の子を白鳥に、男の子を獅子にたとえることでその美しさと強さが表現されている。さらに二首目においては子どもたちの衣服を新調した心地良さが五月に咲く「花あやめ」と重ねてさわやかに歌い出されている。上記の二首は、晶子が子どもたちと共にいることの喜びと楽しさを感じていたことがうかがわれて魅力的である。

晶子は育児の喜びや子どもたちの日々の成長を感じつつ、一方で過ぎ去った自らの若い日々を振り返るようになっていた。「佐保姫」においては育児の歌と並んで以下のような歌も見られる。

若き子はおほむねねたしほろほろと涙するまで胸でいたきまで<sup>16)</sup>

おのれのみ異なるものと思ひしを若き初めのあやまちとして<sup>17)</sup>

母もまたしかく云ひけりその昔ななめにききしをしへの中に<sup>18)</sup>

上記の歌においては若さゆえに思い上がっていた自己への内省と共に、若さゆえに見過ごしていた母の教えのありがたみが淡々と表現されている。このような境涯はおそらく晶子自身が五人の子の母親として日々、子どものことを思い、案じている中から生まれたものではなかったか。他方、「佐保姫」には「若き子」への嫉妬を素直に表現する歌も見られる。ここではすでに過去のものとなった若き日々への追憶と惜別の情が幾分、感傷的に歌われている。

若さへの関心と憧れは、晶子が子どもをテーマに短歌を詠み続けることの原因となっていたように思われる。1911(明治44)年に出版された歌集「春泥集」には以下のような歌がある。

少女子は何のそなへもなきものを矢のごとしげく文たまふかな<sup>19)</sup>

たらちねの親うからよりよそ人をむつまじくしも覚えし少女<sup>20)</sup>

童なる女の肩に山ざくらちるをめでつつ端居するかな<sup>21)</sup>

何の準備もないのに頻りに手紙をもらう少女への嫉妬が垣間見える一首目。親よりも他人に親近感を抱く少女への鋭い観察が生きている二首目。そして自分の娘に降る「山ざくら」を見つつ、縁側でくつろいでいる様子の三首目。これらの歌には子どもに対する晶子の興味のある方が、さまざまな方向に向かっていたこと

を明白に読み取ることが出来る。晶子が子どもに対して重層的な視点で接していたことは、上記の歌からも明らかといえよう。

## 第2節 新たな分野の開拓——童話と評論

### c. 晶子の遊び心—童話「おとぎばなし少年少女」

先に触れたように晶子が初めての童話を雑誌、「少女世界」に発表したのは1907(明治40)年6月のことであった。双子の女の子、八峰、七瀬が生まれて三ヶ月後のことである。晶子は子どもたちのために自分自身で作ったお話を聞かせたいと願ったのである。彼女は言う。

「自分の二人の男の児と二人の女の児とが大きく成って行くに従って、何かお伽噺が要るように成って参りました。それで、初の内は世間に新しく出来たお伽噺の本を買って読んで聞かせるように致して居りましたが、それらのお伽噺には仇打とか、泥坊とか、金銭に関した事とかを書いた物が混ざっていたり、又言葉づかいが野卑であったり、又あまりに教訓がかった事を露骨に書いたりしてあって、児供をのんびりと清く素直に育てよう、潤く大きく楽天的に育てようと考えている私の心持に合わないものが多い所から、近年は出来るだけ自分でお伽噺を作って話して聞かせる事に致して居ります」<sup>22)</sup>

「のんびりと清く素直に育てよう」、「潤く大きく楽天的に育てよう」という言葉からは育児に対しておおらかに構えようとしている晶子の様子が想像できて興味深い。上記の引用からは晶子が童話を子どもたちに「教訓」を与えようとするものというよりは、子どもたちがのびのびと楽しむものとして考えていたことを読み取ることができる。

しかし晶子が童話を執筆するようになったのは、我が子に読み聞かせをするという単純な動機からだけではなかった。晶子が精力的に童話を創作するようになった1907(明治40)年から、童話集「おとぎばなし少年少女」を出版した1910(明治43)年にかけては、「明星」が廃刊に至る時期でもあり、晶子と鉄幹の生活は困窮をきわめていた。このような中で晶子は雑誌に童話を執筆することにより、新たに収入を確保する必要があったのである。この頃、晶子たちの生活は甚だ貧しく、おもちゃも読み物も買い与える余裕はなかったという<sup>23)</sup>。経済的余裕が失われることは、容易に精神的喪失感にも転化する。一定の収入と具体的な目標を失い、放心状態にある鉄幹を前に、晶子は次から次へと童話

を発表していくが、童話執筆はまた晶子自身の「慰め」ともなっていた<sup>24)</sup>。童話というフィクションの世界で想像の翼を広げることが、文学的にも経済的にも精神的にも行き詰まりを見せていた晶子の生活にとって、一種の清涼剤のような役割を果たしていたものと考えられる。

晶子が童話の創作に夢中になっていた時期は、子どもたちのための読み物が急速に広まった時代でもあった。与謝野晶子の童話について研究している古澤夕起子は明治期の後半に子どもたちのメディアが発展した背景として以下の三点を指摘している<sup>25)</sup>。第一に明治期に始まった近代の学校制度が徐々に成熟し、教科外の読み物を欲する段階にきたこと、第二に印刷技術の革新により、雑誌を大量に出版することが可能になったこと、第三に経済的に児童文学を商品とできる生産者、及び消費者が誕生したことである。それではそのような時代に生まれた晶子の童話には、どのような特徴があるのだろうか。

第一に晶子の童話においては、登場人物同士のリズムミカルな会話が頻繁に登場すると共に、言葉遊びの要素が含まれている話が多いという特徴がある。例えば、ほととぎすの声と同じような音の出る笛をテーマにした「ほととぎす笛」という話では以下のような話が、テンポよく進んで行く。ほととぎす笛の音が聞き手によってさまざまに聞こえるという単純な話なのだが、晶子の語り口は実に軽妙で心地良い。

「それから暫くしてまた敏子さんが、『きよん、きよん、きよん、きよん。』と吹きますと、『ゴホンヲヨンダカ。』と兄様には聞えて、机の傍へ行きまして、勉強におかかりになりました。姉さんのお傍でほととぎす笛を敏子さんが吹いた時は、『ピアノヲヒイタカ。』こう聞えまして、姉さんはピアノの蓋をおとりになりました。それから夜分になってから敏子さんの吹いた笛は、『デンキヲツケタカ。』『トケイヲカケタカ。』…などと女中たちには聞えたのでした。」<sup>26)</sup>

上記の話は晶子が雑誌、「少女世界」に発表したものであり、当然、書き言葉である。しかし、弾むような調子のわかりやすい言葉使いは、大人が子どもたちに読み聞かせする言葉、つまり話し言葉として最適であったと思われる。

他にも「おとぎばなし少年少女」においては「女の大将」、「早口言葉」、「鶯の先生」などの話に言葉遊びの要素が含まれており、晶子がいかに言葉の調子やリズムに注意を払っていたかがうかがわれて興味深い。そしてそれは晶子が言葉の意味だけでなく、言葉の流れ

や調子を大切にする短歌という表現形態に熟知していたことと関係が深いと考えられる。歌人、晶子の言語感覚は、童話の創作においても生かされていたといつてよい。

第二に晶子の童話においては動物が主人公となっていたり、動物についての話題を含んでいたりする中で、ユーモアのあるファンタジックな話が多いという特徴がある。「おとぎばなし少年少女」に登場する話を見るだけでも「金魚のお使」、「燕はどこへ行った」、「お化うさぎ」、「虫の病院」など小さい生き物を扱った童話が多いことにすぐに気付くだろう。ここでは母親の出かけている間に、三人の子どもたちが動物園に行ってみたくなる「お留守番」という話をみてみよう。これは子どもたちが留守番をしている間に、部屋の家具や衣服が次々と動物に変身するという奇想天外な話である。

「『熊。』太郎さんが大きい声で言いましたら、壁にかけてありましたお父様の洋服が、むくむくとした熊になりました。『おしどり。』と冬子さんが言いますと、花瓶にさした花が二羽のおしどりになりました。『らくだ。』と太郎さんが言いますと、ピアノが大きいらくだになって歩き出しましたので、三人は驚きました。…『狸』と言ったのは太郎さんでしょう。そうすると、棚の上にあった水差しが狸になって、ひょっくりひょっくりと出て来ました。」<sup>27)</sup>

身近な道具が子どもたちの命令通りに次から次へと動物になるというファンタジックな話は、子どもたちにとっても魅力的なものであったに違いない。居間にある道具を動物や鳥に見立てるといふ何気ない設定は、晶子の生活感覚と創造性の豊かさを感じさせる。

第三に晶子の童話は背景の設定が現実味を帯びているという特徴がある。背景の設定がリアルであるということは、先に挙げた特徴——つまり、ユーモアのあるファンタジックな話が多い——とは矛盾するように思われるかもしれない。誤解を避けるためにもう少し厳密にいうならば、リアルな背景の設定とユーモアのあるファンタジックな話の内容が、程良く調和されているのである。例えば晶子が初めて雑誌に発表した「金魚のお使」という話では当時、開通して間もない甲武線(現在の JR 中央線)が登場する。お使いに行けない女中の代わりに三匹の金魚が電車に乗るといふ設定はファンタジックなのだが、甲武線の描写はリアルである。

「電車は新宿を出て、それから代々木だの千駄ヶ谷だの信濃町だのを通りまして、四谷もとの学習院の下のとんねるへ入りました。急に電気燈がつきまして

そこらが暗くなったものですから、白と斑は夜分になったのだと思ひまして、『ぐう、ぐう、ぐうぐう。』と軒をかいて寝てしまいました…<sup>28)</sup>

金魚同士が他愛ないおしゃべりを繰り返すというファンタジーの一方で甲武線の固有名詞が使われることで子どもたちはリアルな興味も刺激されたであろう。

ところで歌人の松平盟子は、晶子の童話を「健康的な温かさ」に満ちていると評している<sup>29)</sup>。確かにここまで見てきたように晶子の童話はユニークな内容の中に温かみを感じさせるものが多い。しかしその一方で晶子の童話には単に「健康的な温かさ」には収斂できない、冷静な視線といってもいいような客観性が感じられる。そしてそれは晶子がリアルな背景の設定を選好していたことと深く関係していると考えられる。

それでは晶子はこのような童話の構成を意図的に行っていたのだろうか。この点について史料から明確に立証することはできないが、筆者の推測では晶子は意図的というよりむしろ、偶発的に童話を描いていったように思われる。事実、「おとぎばなし少年少女」に掲載されている話は、その展開の仕方に即興性を感じさせるものが多い。それは裏を返せばまとまりのない展開といえなくもない。しかし晶子が夜、寝る前などに即興的にお話を考えつき、目の前にいる子どもたちに語りかけていたものを再構成した童話は、恣意性などは微塵も感じられない自由奔放な遊び心と、身近で現実味のある背景が生み出す冷静なまなざしを兼ね備えたものになったのである。

#### d. 出産・育児をめぐる晶子の考え—評論集「一隅より」

晶子が最初の評論集、「一隅より」を刊行したのは、1911(明治44)年7月のことである。晶子が評論家として出発したこの時期は社会的変動の激しい時代でもあった。1910(明治43)年に日本は韓国を併合、翌年には大逆事件が発生するなど明治政府はその権力を強化していた。1911年は晶子にとっても非常に忙しい年であった。1月には第九歌集、「春泥集」を上梓、2月には四女宇智子を出産、9月には平塚らいてうによる雑誌、「青鞥」の賛助員となり、11月には麴町区中六番町へ転居、夫の鉄幹はヨーロッパに出发するなど七人の子どもを抱えて目まぐるしい日々を送っていたであろうことが想像できる。

「一隅より」は後に母性保護論争などに参加し、評論家として活躍することになる晶子のスタート地点に位置付けられる。この本は1908(明治41)年から1911(明

治44)年にかけて晶子が新聞や雑誌に頼まれて書いたものの、いわば寄せ集めといった風を呈している。しかし、「一隅より」は単に評論が集められただけの本ではない。その本の中では「婦人と思想」、「女子と都会教育」、「女子の独立自営」といった女性問題から「雨の半日」、「清少納言の事ども」といったエッセー風の話題まで実に多岐に渡るテーマが取り上げられている。しかしその中でもとりわけここで注目したいのは出産・育児について扱われた三つの論評である。それらの評論はこれまでの短歌や童話からは読み取ることの出来ない、出産や育児についての晶子の本音があらわになっているという点で興味を惹く。

まず見ておきたいのは1909(明治42)年、三男、麟が誕生した直後に医者を目を盗んで書かれた「産屋物語」である。ここで晶子は冒頭から「…産と言う命掛の事件には男は何の関係も無く、又何の役にも立ちません。是は天下の婦人が遍く負うて居る大役であって、国家が大切だの、学問が何うの、戦争が何のと申しましても、女が人間を生むと言う此大役に優るものは無からうと存じます」と強い調子で述べる<sup>30)</sup>。女性の負う出産がいかに「命掛」であるかを説く晶子は痛快とも言える調子で「男は…何の役にも立ちません」と言い切っている。そして「男を女が軽蔑する理由が無い様に、女を男の方が軽蔑せられる訳は到底無いと考えます」と男女同権の主張を展開する<sup>31)</sup>。「国家」や「学問」や「戦争」の価値が重視された明治期において出産の意味を自らの経験から説く晶子の論述は稀少なものであった。

しかし晶子の主張がさらに鋭利なものとなるのは1911(明治44)年、四女宇智子が生まれた年に書かれた「産褥の記」である。実は四女、宇智子は双子のひとりであり、晶子はもうひとりの姉妹を逆子による死産で失っていた。晶子は双子を出産した経験を「産前から産後へかけて七八日間は全く一睡もしなかった。産前の二夜は横になると飛行機の様な形をした物がお腹から胸へ上る気がして、窒息する程呼吸が切ないので、真直に座った俣呻き呻き戸の隙間の白むのを待って居た」と悲壮感さえ漂う調子で語っている<sup>32)</sup>。

こうして「産褥の記」では出産を経た女性の立場から「命がけで新しい人間の増殖に尽す」ことの意味が説かれていく。この壮絶ともいえる体験は、晶子の言葉をさらに強靱なものにしたのである。彼女は言う。

「婦人問題を論ずる男の方の中に、女の体質を初から弱いものだと見て居る人のあるのは可笑しい。そう言う人に問いたいのは、男の体質はお産ほどの苦痛に堪えられるか。わたしは今度で六度産をして八人の児

を挙げ、七人の新しい人間を世に殖した。…わたしは野蛮の遺風である武士道は嫌ですけど、命がけて新しい人間の増殖に尽す婦道は永久に光輝があって…真に人類の幸福は此婦道から生じると思うのです。是は石婦の空言では無い、わたしの胎を裂いて八人の児を浄めた血で書いて置く。』<sup>33)</sup>

「わたしの胎を裂いて八人の児を浄めた血」で書くと断言する時、そこには出産という女性の重要な役割が軽視されてきた事への徹底した怒りが感じられる。しかし有無を言わせない語調で晶子が上記の論を展開する時、それは単に女性の身体的・精神的な弱さを否定しようとしているわけではない。あるいは「産屋日記」で主張していたような男女同権の主張が繰り返されているわけでもない。ここでの晶子は一步、先に進んでいる。晶子は「命がけて新しい人間の増殖に尽す婦道」こそ「人類の幸福」の礎になると説く。出産を辛いながらも全面的に肯定的に受けとめ、さらにその経験を元に「婦道」を提唱する時、そこに「命」を尊ぶ思想、「婦道」が誕生する。残念なことに晶子はなぜ婦道が必要なのか、婦道とは一体、どんなものなのかこれ以上議論しようとしてはいない。しかし、大正期に入って評論家として晶子が活躍する際の思想の根幹となっていたことは想像に難くない。

さて「一隅より」においてももう一点注目したいのは、晶子が自分の家の育児の方針について具体的に述べていることである。1911(明治44)年、長男の光が九歳になった年に書かれた「私の宅の子供」という随筆風の評論においては、晶子の実生活がありありと描写されていて興味深い。それでは晶子はどのような育児を行っていたのか。

まず第一に、生活習慣の重視である。晶子の家では「食物の好き嫌い」は基本的に認めず「間食もさせない」という<sup>34)</sup>。ただし、晶子は親からの一方的な指示のみでしつけをしようとはしていない。子どもたちの事は出来るだけ自分たちで出来るようにと「自分の机の中は自分で整理し、自分の寝衣は自分で着替」え、子どもたち自身で「午後七時」には寝床に向かうと記している。晶子はまた、このような生活習慣の重視が子どもたちの「大変快活」な気性を生んでいると誇らしげに書く<sup>35)</sup>。さらに子どもは「親の従属物」ではなく、「立派な新しい世界の一人」であると語っていることから分かるように、晶子は規則正しい生活を送る中で、自立心を持った個として子どもを認めようと心がけていたのである。これはまた晶子たちが伝統的な家風を重んじる家族ではなく、お互いを認め合う「夫婦単位」の生

活を送っている事とつながっていてもいた<sup>36)</sup>。

晶子による育児の方針として第二に挙げられるのは、学問や趣味の重視である。前述したように晶子の生活は決して裕福なものではなかった。しかしそのような貧困な生活の中でも晶子は子どもたちへの十分な教育的投資を怠らなかった。彼女は言う。

「長男は…画も好きですから毎日日曜に藤島先生のお宅で遊半分に教えて頂きます。又四才位から物の勘定を習わせましたので長男も二男も数学の才に富んで居ります。…小学から帰って来れば勝手に遊ばせて置いて復習などは一度もさせません。但し両親は子供の知らぬ間に小学の教科書を読んで置きますから、子供が学校で何を習って居ると言う事を心得て居て、時時話の序に質問をして子供の記憶と注意とを新しくして遣ります。』<sup>37)</sup>

経済的余裕のない生活の中で絵や数学を習わせていたという事実は、晶子たちがいかに教育に価値を置いていたかを示唆している。さらに小学校の教科書を読んでおいてさりげなく日常の生活の中で話題にするという晶子の姿勢は、子どもたちの好奇心を刺激するものであったと想像できる。

ちなみに「一隅より」刊行の年、晶子は34歳を迎えていた。30代半ばにして童話ばかりでなく、評論にも挑戦し始めた晶子——そこに尽きる事のないエネルギーを文学に家庭にそして社会に注いでいた女性の、確固たる思想の確立とその思想の力強さを見ることは簡単である。しかしそのような力強さは、「みだれ髪」以降、出産・育児に翻弄されながらも試行錯誤を繰り返した晶子の日常から生まれ出たものであることをあらためて確認しておきたい。

### 第3節 歌集・「青海波」の意味

#### e. 育児の現場

晶子が歌集「青海波」を出版したのは、1911(明治44)年11月に鉄幹がパリに出発して二ヶ月後のことであった。パリに到着した鉄幹は四、五ヶ月の間でも見物に来るように晶子に呼びかけていた。晶子はこの時、九歳の光、七歳の秀、五歳の八峰、七瀬、三歳の麟、二歳の佐保子、一歳の宇智子と小さな子どもたちを七人も抱えており、渡航するためにはどうにかして新たに資金を捻出する必要がある。歌集、「青海波」はまさに渡航資金の一部を生み出すために、1912(明治45)年1月に刊行されたのである。ちなみに「青海波」の広告にはローマ字で晶子の歌、「海こえん。いざや心にあ

らぬ日を送らぬ人とわれならんため」と記されていたという<sup>38)</sup>。この事実からは洋行を決断した晶子の強い意志が伝わってくる。

しかし晶子が渡仏を決意したのは、異国の芸術や文学に触れたいがためだけではなく、晶子は「君こいし寝てもさめてもくる髪を梳きても筆の柄をながめても」と詠んでおり、愛する人、鉄幹に会いたいと願う気持ちは増すばかりであった<sup>39)</sup>。そのような中で出版された「青海波」における中心テーマが、鉄幹への恋慕のみに集中しているかということ必ずしもそうではない。「青海波」において晶子は出産・育児についてこれまでよりも強烈な勢いで歌い出すようになっていた。

「青海波」における育児についての歌の特徴は、以下の三点にまとめられる。第一に子どもと晶子自身の生活が関係づけて詠まれていることである。

兎の絵魚の絵描きて永き日を子に見することややあぢきなし<sup>40)</sup>

七つの子かたはらに来てわが歌をすこしづつ読む春の夕ぐれ<sup>41)</sup>

秋来ぬと白き障子のたてられぬ太鼓うつ子の部屋も書斎も<sup>42)</sup>

これらの歌においては晶子と子どもとの関係が、生活全体を視野に入れた上で「常夏」や「佐保姫」よりもやや巨視的な視点で描かれている。このように晶子が自らの生活を視野に入れつつ子どものことを詠むようになったのは、子どもたちの成長と共に子どもと晶子との距離が以前よりも広がり、歌を詠む姿勢にある種の余裕が出てきたことを示唆している。

第二に「青海波」においては晶子と子どもとの生活がマクロな視点で詠まれる一方で、晶子自身、家庭生活における切迫した寂しさと虚無感を表現していることである。

無くもがな世の亡ぶ日も気のふれし母をわが子の目に映す日も<sup>43)</sup>

ことごとく因縁和合なしつと思へる家もときに寂しき<sup>44)</sup>

子等を率て家うつりすれ君なくてさすらひ人となりけるかな<sup>45)</sup>

「世の亡ぶ日」も自分が「気のふれ」る日も同時にあり得ると予想している前者の歌からは、わが子の前で自らの気持ちをコントロールできないかのような、切迫した焦りと憂いを感じられる。一方、後者の歌からは「因縁和合」して日々を過ごしているはずの家がふと寂しく感じられるというやるせなさがうかがわれる。これらの歌からは晶子が鉄幹と七人の子どもたちとの生

活を無我夢中で送る一方で、自らの暮らしを冷めたまなざしで見つめていることが分かる。

第三に「青海波」においては育児にともなうネガティブな側面、あるいはコントロールの効かない子ども自身の性質や行動の様子が、包み隠さず詠まれていることである。

かなしくもわが子の指にはさみたる蝶の羽より白き粉のちる<sup>46)</sup>

腹立ちて炭まきちらす三つの子をなすにまかせてうぐいすを聞く<sup>47)</sup>

清らにも我児の病める悲しさよ水の底なる月のこちに<sup>48)</sup>

蝶を自分の指につかんで傷付けてしまう子どもの姿、癩癩を起こして炭をまきちらしてしまう子どもをあやすこともなく、うぐいすの鳴き声を聞いている晶子、そして病気になってしまった子どもを前に、心配の余り水底の月のように冷え冷えとした悲しさを味わっている晶子——ここには育児の現場が淡々と、そして流れるような調いで詠み込まれている。「蝶の羽」、「うぐいす」、そして「水の底なる月」といった透明感のある具体物を使うことで、晶子の歌は育児の現場のぬきさしならない様子を歌いながらも、過度に深刻に陥いることもなく、その美しさと気品を保っているように思われる。

#### f. 出産の激しさ

「青海波」を特徴付けているもの——それは出産の激しさ、そして厳しさが隠すことなく切々と歌い出されていることである。女性が出産について話すことさえはばかれた時代に、晶子はある覚悟と勇気を持って出産の現場を歌っている。まずは1910(明治43)年に双子を妊娠した際の歌を見てみよう。それ以前にも晶子は八峰、七瀬の双子を出産しているが、再び彼女は双子を妊娠したのである。

十界に百界にまだ知らぬこと一つあるごとし身ごもりしより<sup>49)</sup>

不可思議は天に二日のあるよりもわが体に鳴る三つの心臓<sup>50)</sup>

この度は命あやふし母を焼く迦具土ふたりわが胎に居る<sup>51)</sup>

「十界」、「百界」、「天」という言葉を用いつつ晶子は妊娠したことの驚きと畏れをありありと表現している。さらに三首目において「命あやふし」と率直に自らの心情を吐露しているように、晶子は「この度」の妊娠、出産がいかに命がけのものであるかを三十一音のなかに



凝縮して歌っている。

印象的なのは、晶子が出産の激しさを親と子の戦いとして歌っていることである。晶子にとって出産は命を誕生させる喜びとして表現できるような生半可なものではなかった。ここでは出産が母の体を徹底して傷付けるもの、そして死のイメージをとまなうものとして表現されている。

親と子の戦ふはじめ悲しくも新しき世の生るるはじめ<sup>52)</sup>

その母の骨ことごとく碎かるる苛責の中に健き子の啼く<sup>53)</sup>

虚無を生む死を生むかかる大事をも夢とうつつの境にて聞く<sup>54)</sup>

「戦」、「苛責」、「虚無」、そして「死」。このような言葉の選択からは晶子がいかに苦しみの果てに出産に挑んだかが見て取れる。彼女にとって、新たな生を誕生させることはまさに死と隣り合わせの経験であり、出産は親子の慈愛と喜びに満ちた経験というより、むしろ生死を左右し得る親子の戦いとして表現されるものであった。実際、晶子は前述したように双子のうち一人を死産で失ったのである。

さらに「青海波」における出産に関する歌を特徴付けているのは、晶子が幾つかの動物を提示したり、出産にとまなう女性の出血を堂々と表現したりするなかから「母」になることの身体的苦悩を徹底して歌っていることである。

悪龍となりて苦しみ猪となりて啼かずば人の生み難きかな<sup>55)</sup>

産のあと頭つめたく血の失せて氷の中の魚となりゆく<sup>56)</sup>

上記の二首は出産のまさにその瞬間を詠っていながらも激しさと静けさを表現するという点である種、対照的である。前者の歌は「悪龍」という実在しないながらも猛々しい生き物と、「猪」という強さと激しさを想起させる動物をたたみかけるように登場させながら、出産に到るプロセスの辛さを歌っている。一方で後者の歌は出血をとまなう出産直後の身体感覚が「氷の中の魚」と表現されている。「氷の中の魚」という言葉からは、しびれるほどに冷え切った晶子の身体の感覚と痛々しいほどに冴えている出産後の晶子の心情とが同時に伝わってくる。

「青海波」に掲載されている短歌からは、晶子がいかに出産を通して身体を酷使し切っていたか、そして時に家庭や子どもに対する苦々しい思いを抱きながら、育児に取り組んでいたかが分かる。確かに晶子にとっ

て出産・育児は、ある種の負の経験を含み込んだものであった。しかし晶子は出産・育児という清濁合わせ持った人生の出来事を、自らの創作活動の土台に据えていったのである。

母親になった直後に出版された歌集よりも、はるかに迫力のある歌集、「青海波」——このような作品を可能にしたのは、短歌だけではなく童話や評論という表現形態にも挑戦しながら、子どもに関する思いを晶子が自由奔放に、そして正直に表現し続けたからではなかったか。そして明治期における晶子の作品全体からは多少の失敗や後悔を含みつつもいかに実直に出産・育児に立ち向かっていったかが読み取れる。出産や育児に関する女性の発言が限られていた明治期において、晶子の創作活動は出産・育児に対する現実的で聡明なまなごしに支えられていたのである。

\*本論文においては旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いにあらためた。ただし短歌に関しては旧仮名遣いで記載した。

(指導教官 金森修教授)

## 註

- 1)ここでは代表的な研究を幾つか挙げるに留めておく。『みだれ髪』に関するものとして松田好夫、『みだれ髪研究』、一正堂、1952、佐竹壽彦、『全積みだれ髪研究』、有朋堂、1957がある。その他、香内信子編、『資料母性保護論争』、ドメス出版、1984、平子恭子、『与謝野晶子の教育思想』、桜楓社、1992、上笹一郎、『与謝野晶子の児童文学』、関西児童文化史研究会、1988など。
- 2)松平盟子、「子供へのまなごし——おとぎ話と短歌」、『NHK歌壇』2004年4月号、pp.18-20。
- 3)cf.この辺りの経緯については、山本千恵、『山の動く日きたる評伝与謝野晶子』、大月書店、1986が詳しい。
- 4)与謝野晶子、『与謝野晶子全集第一巻』、講談社、1979、pp.406-407。この歌は初版には掲載されていない。なお本論文においては講談社の全集を晶子の作品を引用する際の定本として用いた。
- 5)cf.山本千恵、全掲書、及び松平盟子、「詩『君死にたまふこと勿れ』の波紋」、『NHK歌壇』2003年9月号を参照した。
- 6)cf.晶子の詩の三ヶ月前の『明星』には平出修による「いわゆる戦争文学を排す」が掲載されていた。
- 7)山本千恵、前掲書、1986、p.54。
- 8)与謝野晶子、『与謝野晶子全集第一巻』、p.129。
- 9)同上、p.201。
- 10)同上、p.219。
- 11)同上、p.248。
- 12)同上、p.285。
- 13)山本千恵、前掲書、1986、p.66。
- 14)与謝野晶子、『与謝野晶子全集第二巻』、p.31。
- 15)同上、p.32。

- 16) 同上, p.18。
- 17) 同上, p.31。
- 18) 同上, p.15。
- 19) 同上, p.115。
- 20) 同上, p.127。
- 21) 同上, p.133。
- 22) 与謝野晶子, 『与謝野晶子全集第十二卷』, 講談社, 1980, p.2。
- 23) 同上, p.569。木俣修の解説による。
- 24) この点については晶子の童話について研究している古澤夕起子が強調している。Cf.上田博, 富村俊造編, 『与謝野晶子を学ぶ人のために』世界思想社, 1995, 所収の古澤夕起子, 「与謝野晶子の童話」を参照。
- 25) 古澤夕起子, 同上, p.119。
- 26) 与謝野晶子, 『与謝野晶子全集第十二卷』, pp.123-124。
- 27) 同上, pp.52-53。
- 28) 同上, p.31。
- 29) 松平盟子, 『NHK 歌壇』, 2004年4月号, p.19。
- 30) 与謝野晶子, 『与謝野晶子全集第十四卷』, 講談社, 1980, p.3。
- 31) 同上, p.6。
- 32) 同上, p.94。
- 33) 同上, pp.98-99。
- 34) 同上, p.137。
- 35) 同上, p.134。
- 36) 同上, p.137。
- 37) 同上, p.136。
- 38) 山本千恵, 前掲書, p.88。
- 39) 与謝野晶子, 『与謝野晶子全集第二卷』, 講談社, 1980, p.239。
- 40) 同上, p.172。
- 41) 同上, p.177。
- 42) 同上, p.188。
- 43) 同上, p.175。
- 44) 同上, p.177。
- 45) 同上, p.241。
- 46) 同上, p.210。
- 47) 同上, p.210。
- 48) 同上, p.217。
- 49) 同上, p.193。
- 50) 同上, p.194。この歌に注目し, さらにその背景に関する記述を含んでいるものとして, 竹西寛子, 『陸は海より悲しきものを』, 筑摩書房, 2004を参照した。
- 51) 同上, p.194。
- 52) 同上, p.195。
- 53) 同上, p.195。
- 54) 同上, p.195。
- 55) 同上, p.194。
- 56) 同上, p.196。